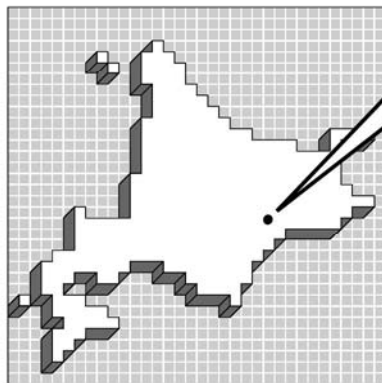


連載 わがマチの自慢 No. 7



釧路市

— 釧路という異国
(世界ブランド
“くしろ”を標榜)—



(釧路市街地空撮)

わがマチの自慢第七回は、釧路市を取り上げ、「釧路という異国」を紹介する。

1. 釧路という異国

釧路市は平成一七年に旧釧路市、阿寒町、音別町が合併し、「釧路湿原」「阿

寒」の二つの国立公園、大規模な食品・製薬工場、製紙工場、全国唯一の石炭鉱業所を有している他市町村に類を見ないスケールの大きなマチである。

上記の地域産業を支えているのが、重要港湾釧路港、釧路空港であり、北海道横断自動車道が完成すると、ますます流通機能が高まるものと期待される。

国内有数の水揚げ量を誇る水産業、豊富な森林資源を有する林業、背後圏の酪農をはじめとする豊かな農業に支えられ、これらを背景に食料基地を自認し、自然環境保全、環境調和型の循環社会の実現を目指している。

特別天然記念物「タンチヨウ」や阿寒湖の「マリモ」をはじめとする世界的にも貴重で魅力あふれる地域資源が豊富にあり、「夏、涼しい」をうたい文句に移住・夏季の長期滞在を誘い、ロマンティックな海霧、海外から訪れる船乗りから「世界三大夕日」と称賛される釧路港の夕景、数々の有名なドラマロケ地など、釧路の魅力を高めて余りある要素が盛り沢山にあり、自ら「釧路という異国」と名乗る所以であるうか。

2. ある農家の奮闘

「釧路という異国」の要素は、農業に目を向けると、過酷な環境となつて立ちはだかる。

冷涼な気候（涼しい夏）、やせた土地に抗して、農業を営む困難さは想像に難くない。極言すると、釧路の農業の歴史は泥炭土壌とのたたかいであったという。

釧路市の気候は、平均気温が5℃〜6℃と冷涼、盛夏時においても二五℃を超



(夏の阿寒湖)



(釧路湿原空撮)



(タンチョウ)

えることはまれ、年間総降雨量は一、〇〇〇mm程度、台風・温帯低気圧の影響を受ける夏季に多く、冬の積雪深は二五cmから三五cmと浅いが、低温のため土壌凍結は深く、融解も遅い。六月から八月には海霧が発生し、その影響で日照不足となり、農作物の成長が阻害されやすい。

釧路市の農業生産額において、生乳が六七%、肉用牛が二八%を占める中で、平成二二年度農林水産大臣賞を受賞した肉用牛経営・榛澤^{はんざわ}牧場榛澤保彦（七四歳）さん恵美子さん夫妻を紹介する。

のこと。

『自給飼料と食品製造副産物を有効利用した肉用牛経営・牛肉生産に取り組んだ頃、榛澤牧場の理念である、農産加工副産物を利用した資源循環型食肉生産の普及・啓蒙を図ることを目的とした「特定非営利活動法人 環境リサイクル肉牛協議会」が平成一二年に設立された。この協議会では、農産加工副産物や牧草などを有効に利用し、輸入穀物飼料への依存を抑えて飼料自給率の向上を図るとともに、堆肥を畑地還元して資源循環型の

『榛澤さんは英国原産のアンガス牛を中心に肉用牛を二七〇頭を飼育。繁殖から肥育まで手掛けている。道内の加工工場を出たジャガイモや長いものくずを餌として与えていることや、天然更新に任せた草地で放牧し、輸入穀物を減らす取り組みを発表した。地域の資源を活用し、コスト低減につながっていることが評価された。』（平成二二年十一月二三日付け北海道新聞農林水産大臣賞受賞記事より）と

牛肉生産方式で作られた肉牛を、環境に優しい肉牛生産の実践として認証を与えている。『eーびーふ』の認証事業を展開しているが、榛澤牧場は平成一三年にこの『eーびーふ』認証第一号農場となり、銘柄化・差別化を図るとともに、環境リサイクル肉牛協議会の会員として同じ理念を持つ生産者と活動している。

『eーびーふ』の認証をとり、安全・安心な環境にやさしい牛肉生産を行っているなかで、平成一七年から生協と取引を始め、生協の「パルシステム」で「生産者の顔の見える牛肉」の供給を開始し



(榛澤夫妻とアンガス)

た。』(以上、中央畜産会資料より)

驚くべきことに、榛澤さんは、工業高校を卒業後、北見市で電気店を営み、農業、畜産とは縁のない生活をしてきたが、四二歳の時、恵美子さんの実家の酪農経営を引き継ぎ、独学で現在の経営方式に至ったとのことである。受賞について榛澤さんは『素人が迷惑を掛けながらやってきた。支えてもらった地域の皆さんのおかげ』『農業を通して地域にどう還元できるかを考えていきたい』と話している。(前掲、北海道新聞記事より)

3. 森林都市釧路

釧路市は、さらに森林都市としての顔をもつ。

釧路市は、平成一七年の三市町合併により、森林面積は約一〇万ha(全道の市で一位)。人口一〇万人、森林面積一〇万haを超えるのは全国で三市のみと、まさに釧路市は「森林都市」(森林率七四%)と云うことができよう。

この豊富な森林資源はカラマツ等針葉

樹が中心であるが、その多くが樹齢三〇年から五〇年と利用期を迎えていながら、木材の需要が低く有効に活用されていないという実状にある。この課題に対し、釧路の木を取り巻く様々な関係者が参画する「釧路森林資源活用円卓会議」が平成二二年十一月に設置された。ここでの議論をもとに、地域材利用拡大にあたり、その課題解決のため「くしろ木づなプロジェクト」を実施している。

円卓会議では、①「もつと知る、くしろの木」、②「もつと使う、くしろの木」、③「もつと伝える、くしろの木と技」という三つのステージに分け、①では研修会を開催するなどし、地域材の品質を明確にし、流通コストの低減をめざし、②では公共・民間を問わず施設の木造化推進、木造住宅の推進、地域材を使った商品開発(カラマツ製幼児用椅子、クリアーゼル、カラマツ製幼児用椅子、クリアーゼストナチュラルウッド(釧路産トドマツ精油とトドマツ木工品の組み合わせで空気を浄化する)、③では小学校木育講座、各種イベント出展、くしろ木づな

フェスティバル開催などの実績を上げ、釧路市工業統計調査によると、「木材・木製品製造業」は平成二二年製造品出荷額一三三、七七〇万円に対し、平成二五年同一六九、八七七万円と三億二千万円程増加し、成果を上げつつある。



(くしろ木づなフェスティバルの1シーン)

4. 世界ブランド「くしろ」へ

釧路市には釧路にしかない数多の素晴らしい魅力があり、それが「釧路という異国」を形成しているものと思われる。これを基盤として、環境と調和した国際

観光都市として世界ブランド「くしろ」を発信していきたいとしている。

農業、林業の取り組みのほんの一部を見てきたが、これら天与の数多の観光資源に安住せず、市民個々、産業個々の創意工夫、努力の積み重ねが世界ブランド「くしろ」を更に磨いていくのであろう。

また、釧路振興局においても、釧路を含めた釧路圏（くしろ地域）で「くしろ地域ブランド」を提案している。『くしろ地域ブランド』は、くしろ地域の世界に誇れる自然環境を「価値の源泉」と捉え、くしろ地域に暮らすすべての人は、地域の「価値の源泉」が育



(釧路港と花火)

む良質な農水産物や他では体験できない観光資源の素晴らしさを認識・共有しようという考え方です。そして、「くしろ地域ブランド」を活用した商品やサービスを地域から数多く創造・拡大し、消費者・顧客が増加することで、更にブランド価値が高まるという好循環の創出を目指しています。そして、地域経済の活性化や連携等の地域力が高まることで、地域に新たな雇用環境と就労機会を生み出し、次代を担う世代が暮らしていける「持続可能な地域社会」を実現できると考えています。』（北海道釧路総合振興局「くしろ地域ブランド」ガイドブックより）
(写真提供：釧路市)

〈取材後記〉

釧路市には私的な旅行を含めても両手の指に余る程しか訪れたことはないが、何故か一度も霧に霞む幣舞橋を見たことはない。幸運なのか不運なのか迷うところである。

一般社団法人 北海道地域農業研究所
特別研究員 西野義隆